

街頭私語

芦田宗、同志意識烈々。

祖師、同志ご同行、かたみに團扇高らか。

芦田さん、造語に巧に人を捕ふ。

自己を読むは既に陳し。

デヲ

一篇一問

一束の綴方

單純化、さては七變化、

共育

芦田さん尋二の『まはりつこ』の授業をなす。

芦田さん『皆さん、まはりつこに何を教へられたか。』

兒童一同、目をバチクリ

咄、縁なき衆生、祖師大いにぢれる。

芦田さん、『歸つて之を母に問へ。』

芦田さん、教壇行脚より遊行の語に轉ず。

道の至れるもの淡々ミして水の如し。

教壇行脚の語、ドリコノの如く口あたりはよし。

遊行の語に如かざるなり。行なくば更によし。

單純化。

教師の單純化か。兒童の單純化か。

末梢的な第二義に彷徨して文の生命に味到する能はざる者に投ぜられたる警句に非ずや。
しからば教師の單純化は、やがて兒童のそれを期す。

七變化。

芦田宗、教式、七變化といふ。

七といふも雖も通讀を重視せんとする一二の變化に過ぎず。
大いによし。

が此の通讀、目よりも耳にて切れぬに讀む通讀多き様なり。

おのがじし、力に即せる目にて讀み足らしむる通讀もがな。書物をしつかり持たせて。

讀み不足の上に投ぐる教師の言葉は兎角空聲に歸す。

祖師にして、あの教式よし。

あの教式は特設授業なきによし。觀せる授業なり。

年中はわろし。

まづ祖師の力を養へ。眞似は禁物。

七變化の教式は兒童の自學を豫件し又同時に自學を標的とすべし。

祖師の力があの教式を驅使してゐる。この場合問題なし。

問題は形ばかり眞似ようとするお同行衆の盲信者のことだ。

一篇一問。

文意の充足せる一語一問を發見して指導の第一原理とせんとするに在るべし。

必ずしも一篇一語一問と限定すべからず。之も警句なり。文の構造性質により同格の數個の
單文の羅列を以て成るものあり。

一篇一問の一に譯着せば迷ふべし。

是の如く一篇一問を解せば一篇一問は兒童への切實なる要求なり。

芦田さん、尋三の雨で雨が何處から來てどこへ行くかを全文を約括せる一問を以て教授を進
む。

此の場合兒童が學習の結果、雨の一篇を雨がどこから來てどこへ行くか、兒童自身の力を
以て要約するに至るこそが教師の一篇一問の終局の目標。

共育を高張して教育を修正す。

芦田さんの授業には臨濟一唱式のまじりあり。
あの程度の共育なり。

芦田さん雨の授業に雨の観察方法を指導す。

傘をささねば母さんに叱られること。傘を背にかう傾けて雨だれが鼻をすれすれに落ちる位にしてから、かんで観ることを委曲す。

雨水が糸すぢ程の流れをなして芥子粒ほどの砂をはこぶあたり、説話至妙、皆シンとする。

芦田さん、尋二のまはりつこの授業に『かへつて』の語を授くるに反復懇切を極む。

一篇一語の適例か。

アンチ芦田宗曰く

いかんか讀方の獨自性乎。

修身は相去る幾何ぞや。

道を行きの團扇太鼓、讀みの聲を消す。

徹せざる非ず。聴えざるのみか。

(昭和六、六)

スポーツ禍を排す

眞のスポーツは健康と精神を培ふ体育でなければならない。

歪みを矯めて眞のスポーツを將來せしめたいと思つて、此の一文を呈するものである。

勿論植木に鉢を入れる前に或る程度まで、伸びるが儘にせねばならぬ心遣も充分持つてゐる。

併し馬鹿々々しい話を所在に聴くことも久しいことである。もう大概にしたらさうだ。次の

断片をきいて之でもスポーツ禍を謂へないか。

□選手が續々助膜になつた。又なりつゝある。

□大會出場の爲めの猛練習に僅かの間に二人も骨折者が出た。

□先生が一年中通して選手数名だけの爲に、授業をほうり出して其の方に掛りつ切りになる。

□瀬踏みと度胸だめしといつて授業を休み、選手を引率して數日各地に練習試合を試みる。

修學旅行は其の筋の達によつて、兒童一人一二泊程度の宿泊旅行も可成まかりならぬ今日に於てある。

□大會出場の爲めの費用二千圓とか三千圓ともいふ。

その金は四苦八苦で掻き集める金である。卒業兒童の寄附金にまで手をつけて文句が出たミか出ぬミかいふ。校長轉任後まで其の後始末が附かずに延々になる。

此の數千圓は僅かに九名のためである。そして肋膜になる。

□豫選の大會で司會者が頭の鉢を割られて血まみれになつた。

□應援團の對抗は遂に冷靜なるべき校長をもその渦中に巻きこみ、互に反目するの情勢に至らしめたこと。

□敵應援團の恨みを買つて、校長が天秤棒を用意して警戒のため夜もオチ／＼寝られなかつた。

□インチキ邪神？に町内戸毎にお燈明をあげて大會優勝を祈らせられた。いや祈つた。

□豫選大會に審判官が横つ腹に棒を突きさゝれる所を危く身をかはして免れた。双方の彌次團亂闘。正しく『め組の喧嘩』。時代は徳川舊幕に遡るべきである。

此の歪みはごこから來たか。之は可成複雑である。

併し吾等の立場に在つては、此の歪みは先生の頭の歪みから來たものミ考へたい。群衆の盲目的行動を批判する能力ミ、之に對應すべき用意を缺いた先生の責任として考へたい。

先生達の頭から抜きさらねばならぬことミが二つある。

一、優勝旗やカップは新築落成の餅撒きの餅を拾つた位の軽さで、何も大した名譽のものでない。

一、選手制は偶々全校体育施設の適正を得て全兒童の絶えざる合理的練習の結果から派生した副次的のもので、數名の選手が兒童ミ凡ゆる教育活動ミ時ミ金ミを犠牲にせねばならぬものミ考へることは馬鹿の骨頂だ。

市内職員庭球大會を仔細に觀察するミ、所在に聴く馬鹿々々しさの動因を暗示してゐる。

先生方が世間並にスポーツ大會をやる。此の世間並も批難すべき筋がない。

併し世間並にカップを唯一の目當にして眼の色をかへて、馬鹿らしい努力を拂ふことミはないのである。

朝學校の始業前に炊出しを續けて練習する程のものが無いのである。その金のことも考へねばならない。

先生社會の通念に依るこ

□運動會には從來の賞品を漸次廢すべし。

□學年末の賞狀も廢すべし。

而して其の主張は堂々としてゐる。曰く價值當体の創造が學習の目的でなければならぬ。賞狀賞品等の方便的な動機の下に努力せしめるこはいけな

此の通念を以て推せば優勝族なきさうでもいゝわけだ。

せめて先生方の大會からだけでもカップを唯一の目標とするこを避けたいものである。各校から選手を出してガツ／＼した顔をしてきたない彌次を飛ばして、大會が終つてからも心の隅に餘憤を沈澱させるこがないではないか。

市内職員の庭野球大會は健康ミススポーツを通じての親睦を目的として創められたものであ

る。

拘束感と雜務と疲勞との平常から解放の一日を設けて、心のくまで日光の降る中にスポーツをエンジョイしやうといふのだ。

そして偶然に餅撒の餅が自分の立つてゐたところに落ちて來たから拾つたといふ位の心持でカップを頂けいゝのである。

カップに血眼になるこから、金ミグラウンドやコートが選手數名の専用ミなる。

全職員の健康の爲めに計上せらるべき保護者會体育補助費が數名の而も大會の爲めに費消せられる。

若したり無い費用をさうかせなければならぬといふこにでもなつたら、新なる問題を提起してくる。

選手制で學校單位にチームを作つて對抗意識の熾烈なるまゝに、而もカップや社會的美名(實は空名)を賭けて勝敗を唯一最後の標的たらしめる大會は、終に流石の理念哲學的教育觀を以て鹿爪らしく構へてゐる先生方をしてカップに喰はれ炊出しまでやらせるこになる。

カップや優勝旗を獲得する。之は人間の自己主張の本能、征服慾の充足から来る快感に浸らうとする根深いところから人を衝き動かすのである。

之をコントロールするところに初めてスポーツの教育的價値が存在するのである。

飽くなき優越感征服慾の満喫を以て何等の反省を加へないふここは、之を群衆と幼少年者に於て幾分恕すべしとするも、先生方が社會的情勢の儘に反つて之を助長するに至つては何れもいけな事だ。

選手制大會式スポーツを打破して、普き者の眞の健康と精神を培ふべき正しきスポーツを將來せしむる第一の對症療法は、先づ先生の頭の歪みを正しきに戻すことである。

カップや空名に没頭して、本質的職分を糊塗し公的幸褔すら獲得し得べしとなす輩は教育界より清算せねばならぬ。

又、自滅するであらう。

(昭和六、八、二二)

賞 状 漫 語

伏古のメノコが斯う言ふ。

胸にさけるもクンシヨ

ケチから出るのもクンシヨ

シヤモの言ふここミワカンナイ。

賞状も賞状の眞の意味を認識しないで行使するに、伏古のメノコが勳章と糞を一緒にしたのと同断だ。

賞状は児童の努力や善行に對する教師の自らなる反應として與へらるゝもので、善行爲への承認満足の意味を表示する。

賞状は功利的な報酬ではない承認である。

教師の此の承認は児童の自信を確定し、爾後の彼の善行爲への永續的彈機たらしめる。

教師の承認は規範を代辯せるものである。

故に教師の承認は規範の承認である。

かくして賞状は終に児童の良心の承認を以て最後の標的とする。

◇ 良心の承認満足を最後の標的とするといふことは、換言すれば自立的人格の確立である。

賞状は自律的人格の確立を最後の標的とする教育的手段である。

既に手段である。手段は人に依つて制約される。

賞状の眞義を忘れた濫用は時に有害無用でさへある。

◇ 併し賞状を否定するは早計だ。

之を行使する人の問題である。

運用の適否を謂ふべきである。

◇ 善の爲めに善を行はしめよ。

眞理の爲めに眞理を探求せしめよ。

義務の爲めに義務を。

手段的な賞状は不要である。賞状廢止論者の學理的根據はこれである。

◇ カントの謂ふ所の「汝の行爲の格率が同時に萬人の行爲の普遍的法則たるが如く行へ」

三尺の童子に此の如きことを要求し得べし。なす教師自身が、優勝旗やカップの手段的標的に醜く没頭する教師である。

◇ 現在の自己の不完全な抽象して完全なるべき將來の自己を構成し、之が實現のために永續的に拂はるべき努力を児童に求める事は赤子を驅つてマラソンをさせる様なものだ。

此の如き努力の世界は大人すら至難な一生の課題である。

◇ 人性の事實を直視せよ。

靜かに自己の内に其の眼を向けよ。

現實態としての児童が義務の爲めの義務を要求すべく、如何に弱いものであるかを知るなら

う。

現實遊離の觀念論が我等の一病弊である。

◇ 教育の全領域に亘つて方法上の二大原理がある。

合自然。

合文化。

◇ 第一原理たる合自然は教育教授の方法は兒童の自然性に適應し、其の發達に即すべしといふにある。

之こそ現代内外教育革新論者の最大指標である。

◇ 第一原理たる合自然は兒童の自然性を何處までも甘やかすことを示さない。

自然性はやがて精神性までの昂揚を豫件として肯定せらるべきである。

◇ 賞状は兒童の自律的人格の確立までの手段として、其の自然性に依存せる適切なる教育施設

である。

◇ 要は賞状を適用する人の問題である。

適用する人を顧みずに賞状を否定するは、政黨政治の惡弊に懲りて議會政治を否定して政治のファッショ化を叫ぶに似てゐる。

◇ 賞状問題に關聯して成績考査の客觀性を要求する。

賞状は規範を背後にせる教師の兒童の善行爲への承認であるならば、當然之が制定はいゝ加減な個的主觀に依るものであつてはならない。

◇ 地人みに即せる獨自の主張と施設に乏しい。

教育界の事大主義は全國の學校の施設内容を其の個性を喪はしめて、唯一色に塗りつぶしてゐる。

◇ 中央知名の士の意見と所謂有名學校の施設が無檢討に地方へ移入する。

賞状問題も中央本山の大和尚の舶來ばり説教の地方支院末寺への御利益が少しき、過ぎた感がある。

◇ ◇ ◇

人人都要作工。

大家都有飯吃。

譯

人々はすべて仕事をすべし。

大勢はみんな御飯がたべられる。

註

支那小學校初級用教科書、所載民生、民權、民族の三民主義の中民生を説いた文である、直接的な所注目。
(昭和七、二)

入學試験問題私見

◇

先頃或る中學校の入學試験で豆もやしを手にまらして、之を縦断し胚芽子葉を其の各部分を開口答せしめた學校があつたやうだ。

之は小學校側の日常の教育を方向づける結構なやり方だと思ふ。

上級學校の入學問題が下級學校の教育を破壊し、所謂教科書學校たらしめて兒童の体験、實驗、觀察等の勞作に訴へる教育方法を歪めしむる嫌ひがある。

◇

現行中等學校入學試験制度改正の趣旨は、上級學校の入學に因る下級學校の教育系統の破壊を防止し兒童心身の發達を擁護せんことを在る。

此の趣旨の徹底を期する爲めには實際問題として、次の如き對策を要する。

- 一、中等學校の増設と學級数の増加に依り收容力を大ならしめる。
- 一、學校學級の増加は必ずしも競争試験を緩和せしめない。随つて學校區を設定して或る一つの學校にのみ志願者を集めないこと。
- 一、併し學校區の設定は實行上困難な事情があらう。故に各學校の人的物的設備を充實して實質を向上せしめることに依らねばならない。
- 一、さしあたり對症治として、中等學校側が大學專門學校等への入學率を大ならしめる事

によつて良質の志願者を集め得るだらう。

◇
併し以上の對策中の學校學級の増加設備の充實等は結局金の問題に歸着する。故に已むなくんば現存學校の廢合を行ふに在る。

本道現在の中等學校の分布は曩日の教育網のプランに事實止粗漫の嫌ひがあつて、現存校の廢合を要望する聲が相當高いのである。

併し之は地方的感情と政黨人の特殊な心理と作用によつて、廢合問題は餘り可能性を期待せられない。

◇
併し此處に上述の現行試験制度改正の趣旨を金もかけず學校も建てないで實行し得べき一良策がある。甚だ心細い話だが金に縁のない時節柄實際問題としてこんなことに落ちざるを得ないのである。

それは入學試験問題の選擇にある。

中等學校側の試験問題選定の方針が小學校本來の教育の當處に基づくべきことである。

現行試験制度の條文中の『常識』といふ語は普通用語例に依る平易若しくは百科辭書的の斷

片的知識といふ意味に解され易い。

併し條文中の常識の意味は尋六卒業兒童として、之だけは知らねばならぬ基礎的な系統を指すものと謂ふべきである。

創造性と發展性を内に有つ源本的な教科として、この体系を指すものでなければならぬ。紙に據る教育、教科書に據る詰込、暗記の教育では駄目だ。

中等學校側の試験問題選定が小學校教育の力點を此處に置いて、果して此くの如き知識と能力とを啓培せられしか否かを検討するものであつて欲しい。

暗中模索的な問題、記憶偏重の問題、急造を以て足るものこそせず。過分の準備を必要こそせず地道に勉強さへすれば足る問題としたい。

此くの如き試験問題選擇の方針の下に適良な問題が提供されるならば、小學校側の日常の教育を正しく規制し投機的入學準備に没頭する誤れる者をして反省せしめ、結局良質の實力ある生徒を入學せしむることになる。

◇
之が爲めには適當の機會に中等學校長並に問題選定の衝に當つた者と小學校側とが其の年の入學問題中心の意見交換の會合を催すのも一法と思ふ。

之の主催は學校側でもよからうが、一般の關心を大ならしめる爲めには、道廳當局或ひは北海道聯合教育會研究部主催となり、範圍も札幌位の所が結構と思はれる。

既に之の種の試みは學校側若しくは札幌市教育會あたりのやつたことであるが、一層全道的に呼びかける便宜上希望する。

◇
少くも都市の小學校教育殊に、札幌市は中等學校入學の問題が大きな關心を以て常に教師の頭を支配してゐる。

教師のみでない兒童も父兄も五年あたりから入學といふことで恐怖すら感じてゐる。

加ふるにジャアナリズムが拍車をかけて、校長職員をして如何にして入學率を高むべきかに奔命せしめてゐるのが偽らざる實相である。

日常頭を締めつけてゐる最大關心事が教育を着色し、プロの子弟を輕視せりとの批難の聲を放たしめ、豫習兒童の心身を極度に疲憊せしめ無氣力ならしめて彼等から幸福なるべき少年期を奪ふのである。

◇
郷土教育個性教育勞作教育を高調して道民性を確立し、地を拓く頭と腕の人間との陶冶を

要求してゐる。

併し『何が彼をさうさせたか。』流に人を働き動してゐる根柢的なものをつきこめて、之に即せる對策でなければ實効を收め難いのである。

本氣にやるなら生きた人間の行動の強い彈機をつきこめる要がある。

父兄は手段を選ばず、何でもかんでも入れて貰へばいゝのである。少し身体位如何なつても夜睡れずに神經衰弱になつてゐるのを見ても、入れくゝ子供に迫つてゐるのである。

この活きた事實が根強く小學校教育に働きかけ、其の歪曲を餘儀なくせしめるのである。中等學校入學問題は我國の教育に限り小問題ではない。

之は單に都市教育の問題でない。都市の教育が地方に浸潤するからである。(昭和七、三)

無 題

◇
打水をした舗道にブラタナスの街路樹がすがすがしく緑の陰を落してゐる。

職業婦人が日和下駄も輕げに美しく急いでゐる。眞に都會小景として行人を捕へる。

併し、おはぐる溝の棟割長屋の彼女の生活を考へた時、何か眼の前を暗い陰がすつき過ぎる。美しく生れながら其の娘時代は華かな學生生活の友達を羨みながらメリンスの小布に氣恥しく辨當を忍ばせて、年中通じて十時間の勞働にその若さを摩りへらして行く。彼女の人生の唯一つの願であるべき結婚は年が喰つてしまふのである。

◇
ギリシャの富の神は運命に抱かれた盲目の少年なさうである。

故に富は宿命的であり、盲目的なものに彼女はあきらめてしまふかぎうか。

そして彼女はその子供に、母としてこんなことを語るだらうか。

庭訓は恵まれた物質生活を豫想しなければならぬ。産業革命は家庭を喪失せしめた。彼女はいくら望んでも家庭がないのである。

時勢を救ふ一つの大きなものは家庭の母である。

x x x

◇
國民同盟の中野正剛氏は某誌座談會で新黨樹立に就き、其の綱領と手段とを相當切り込んで具体的に發表してゐる。

この政黨もが掲げるやうに、大衆生活の保證を約束してゐる。其の手段の一つとして最高利潤の制限と最低賃銀の制定とに依り富の分配を公平ならしめんといつてゐる。そして大衆生活の絶体的保證と絶体的を頭にかぶせた保證を約束してゐる。

教育問題に就いても根本的刷新の必要を説き、官立大學の整理やインチキ學校征伐を思ひ切つてやり、地方の中等學校にも言及し政黨人の政黨人の黨略的な動機の下に建てられた學校などは整理してしまへと言つてゐる。

政治家もこゝまできつぱり物をいはなければならなくなつた時世が目につく。大きなお題目を並べた綱領だけでは通用しなくなつたのである。

◇
マルキシズムもファツシヨも共通の社會的土壤に發芽したものである。

一方は國際的であり一方は國家的立場をこるものであるが、共に現在の社會的疾患を大メスを振つて根本的切開をしやうといふ一點に於て共通である。

而も統制ある集團主義を以て臨む點と、現在の議會主義政黨政治に愛想をつかしてゐる點とに於て又共通してゐる。

大衆はマルキシズムやファツシヨに對ししつかりした理論的體系を把握してゐないにしても、

現在の社會的狀態に對し不滿を懐いてゐるこゝだけは事實である。故に此の二つの大きな流れの何れかに共流しやうとする傾向をおびてくる者のあるこゝも社會的事實として否むこゝが出来ない。

政治家の言動が實踐的になりつゝあるこゝは此の際何よりのこゝである。

專檢受驗手数料金の減額、夜間中學制度制定等假令小さい一事でも社會政策的此の種の實行は思想國難打開の一方途として實に結構なこゝである。

× × ×

庭の一隅一坪ばかりの地積に、五六年前に植ゑた薄が軒に届くほゞよく繁つてゐる。

根分けをした方のこゝ比べ物にならない程よく繁つてゐる。

矢張り五六年前に植ゑた菊が、一二年前から下葉に病菌が附いて花も碌なものが咲かなくなつた。そこで根分けをして地味のいゝ所に移したらよく繁つて來た。

五六年來一度も移植をしないで生々々繁る薄も、移植しない爲めに病菌に侵される菊との對照が學校經營上の根底を成す職員組織の上に或る暗示を與へる。

◇

其の薄や菊の有つ性質も生長力も、各々の占めた庭の場所も地味もを關係づけ、この關係を一學校の因襲的空氣も學校長も職員も甲乙の關係に遷して考へるも、學校經營上人事行政上の生きた事象として一考を要する。

× × ×

◇

畫の寫生で原始的直觀を重んずべきこゝが何人にも承認される。

概念で描いてはならない。眼に映つた在りのまゝを忠實に紙に寫すのでなければならぬ。

此の態度を確立するこゝが寫生の出發である。

讀方でも文其のものに直接して摺まれた最初の讀後感を手がかりとして、自ら讀みかへし讀みかへしつゝ最初のものを検證し修正し補正して、之を培つて行くこゝが大事である。

換言するに讀方で大事なこゝは兒童自身が讀みを繰りかへすこゝにより其の原始的直觀を文の客觀性に依據して定着せしめんとする兒童自身の作業過程への傍らからの助言である。

◇

指導者としての教師の讀方に於ける準備は、矢張り兒童の讀む作業過程を忠實に自ら實踐するこゝである。

教師も忠實に文そのものに直接して咀嚼し消化し玩味することである。然るに普通讀方に於ける教師の準備を見るに、參考本涉獵に重きをおいてゐる。知名の教師は教材を自分の力で讀んでくゞ讀みこなしてゆくことを準備の中心としてゐる。況や爾餘の者に於てはだ。

批評會を觀ても批評が高師の訓導や所謂大家の口移しや果ては文學論や教授書の抽象論の生を得意に一席辯ずる風が絶えないのは困つたものだ。

◇
研究教授の教案の教授要旨や流行の教材觀といふ項目のミころの文を通じて其の教授者の力ミ準備とを正直にさらしてゐるミ謂つてもいゝ。參考書の孫引や受賣なき直ぐ目につく。誰の教材觀なのか。
(昭和七、八、二一)

□秋風のさむくふくなべ我宿の

浸芽がもみに蟋蟀なくも

故 小 鹿 先 生

早 春 偶 語

A、すばらしい額だな。玄人の巧者な妙に書道の枷に縛られてゐるのよりも素人の方に面白味があるな。特に維新當時の志士の書には氣魄ミ氣韻が横溢してないよ。

B、然り。書家も手控をめぐつて經書や古文眞實あたりのを拾つて書くやうでは駄目だ。筆端に自分を落して行くのでなくては駄目だ。書は人なり。自分の詩や自分の物を書くのでなくてはな。

此の額なきは南洲の雄大ミ詩人肌のミころを遺憾なく表はしてゐるだらう。

A、南洲ミいへば武者小路實篤の勝安房を見たが少年向きに書いたものだらうが流石に思想

的な男の書いたものだ。深みがあるね。

B、俺の海舟を覚えたのは十歳位の頃だ。死んだ親仁の本箱を探してゐたら氷川清話といふのが出て来た。其の頃からだ。改造社だかが海舟全集を出すやうだが干支廻り来つて再び戊申の春を迎へ、而も明治維新の大變革に照應すべき昭和維新の新春の劈頭、海舟が人々の記憶に甦つて来たことは意義深いことだよ。

A、海舟が幕府の直臣でありながら、有爲の各藩青年浪士を見る毎に幕府を藩を超越した日本人になれと誨へて行く彼の時代の先覺としての公正と明晰には、何せ大政奉還を説く薩藩の小松帶刀や土州の後藤象二郎等でさへ慶喜の前に出て肩衣がブル／＼震へてたといふ時代のことだ、敬服に値するな。

B、封建三百年の傳統を超越して幕府も薩州も長州もなく只、日本人にならうといふのだから中々當時に在つては生命がけだつたものだらう。

ポーランドや印度の亡國の史跡位説いたつて當時の大衆には、何の利き目もなかつたらうか

らな。

A、それに南洲をめぐつて出てくる當年の志士の面目が簡潔な筆に活きてゐる。

海舟が初めて南洲に遇つた時歸つて来て坂本龍馬に告げるところがある。

『おい、今日俺は俺より馬鹿な男に會つて来た。然し俺より脊骨の強い腹の太い男だ。要領の得ない男だ。之で恰度、俺は俺より恐ろしい男が此の世の中に二人出来たわけだ。あの横井小楠と今日の馬鹿とを一人々々にしてくれば何とかなるが、二人一緒になられては恐ろしい事だ。俺もかなはない。横井の考へをあの男が實行するといふことはなればホンに恐ろしいことだ。』

坂本が問ふ。『それは一体誰ですか。』

海舟がいふ。『西郷吉之助といふのだ。』

坂本嗤ふ。『何です。あの豚ですか。』

x x x

◇

秩父宮殿下、三角山の北大スキー大會に御臨場あらせらる。

ジャムプ御覽の後、親しくスキーを試みさせ給ふ。

◇
シャンツエ前の大スロープを極めて鮮やかに大滑走し舊シャンツエの尾根に向はせ給ふ。
ドツミ歡呼と讚嘆の聲が揚る。

◇
白皚々たる峰さいふ峯、谷さいふ谷、一齊にスキーの尖端を殿下の御足跡に向けて雜然たる
ここ恰も點々ミゴマをバラまくが如くにして、而も統制を持しつゝ御後を辿る。

數千の老幼男女スキーを以て目を以て眞に一齊に殿下の御足跡を慕ひ奉つたのである。群星
北辰に向ふが如し。

◇
君民一如の清樂を載する山ミ丘ミ平原ミを冷厳なる中に和やかさを包みつゝ黄昏近き陽光が
サン／＼ミ降り濺いだ。

◇
此の情景こそは所謂朝倉や木丸殿の簡素なる宮殿に、民族隣接し朝夕親しく呼びかはしたる
往古の君民親和の相ではあるまいか。

昭和の新政、復、茲に古くして新しき端祥を看る。

(昭和三、二)

丙丁童子來求火

一

芦田惠之助先生はまごこから見ても禪坊さんです。

西創成で無言の行の授業を拜見しました。

不動心を説かれました。首座の老僧に大馬鹿第一の痛棒を喰はせました。

讀方の授業さいふ感じではありません。

山房で誰僧が大和尚の禪棒を喫すさいふ感じですが。

先生は又兒童の舉手に深い意味を籠めて戒めました。

いゝ加減な腹のきまらないグラ／＼の舉手に大きな眼玉を剥きました。

恰度臨濟一唱さいふ圖でも見るやうでした。

丙丁童子、來求火の引例も其の人にふさはしいと思ひました。

講演も圓覺寺の法話のやうでした。

一体先生の風貌が何よりも、その禪坊さんを思はせませんか。
お腹をボンミ出ばらせた具合なごも本當に大和尚の格ではありませんか。

二

併しあの日の島市醫さんは先生よりもモット／＼禪坊さんのやうに思はれました。
先生の無言の行の山寺のやうな沈黙が暫時占領しました。
其の沈黙の中をノホツミ島市醫さんが立あがりました。
既に禪機熟すみ見受けられました。

島市醫さんは小學校令第一條を掲げて其處に質問の立場を据えました。

『小學校令第一條の兒童身体の發達に留意してまいふところは、爾餘の道德教育、國民教育、生活教育等のすべてに繋つてゐねばなりません。しかるに今日の御授業はこの點に御注意になられましたか。あの兒童の姿勢はさうでした。本ミ眼ミの距離はさうでした。』
ミ眞つ向に押してゆきました。

三

島市醫さんは口のソモサンミ諄々ミ質問を繰り出して行きましたが、お顔は何も語らぬ無表情でございました。

無表情ではありましたが、島市醫さんは唯眞面目だけを其の中に包んでゐました。

四

マカ不思議の不動心を説く芦田先生のお顔ミ島市醫さんの小學校令第一條のお顔ミを、かたみに盗み視せざるを得ませんでした。

五

芦田先生は大和尚の貫祿です。
ニンワリお笑ひになつて島市醫さんの小學校令第一條に敬意を表されました。

六

私は島市醫さんのお顔がすつ／＼禪坊さんに見えました。

× × ×

一

蜘蛛は台所の棚のミところに巢をかけました。
大きなからだを放射状の中心に頑張らせてゐました。
園藝用のシャベルで突き落しました。
蜘蛛は棚の上に肢をち／＼めて圓くなつて動かなくなりました。敵の發見を防ぐ爲にヒツソリ

鎖りかへつたのです。上から見下してゐる目を無論豫想しませんでした。
私は思はず蜘蛛の憐れさをフンミ鼻で笑ひました。

二

暫くして蜘蛛は逃げる好機を掴み得たかの如く、今こそ大急ぎで動き出しました。
私は又シャルベルで一突き、つきました。又肢をちやめて假死の状態をよそほひました。そつ
ミシャルベルの上に載せて外に持つてゆきました。

蜘蛛はシャルベルの上に如何にも我が策の巧妙を誇る狡黠を浮べてゐるものの如く、ジツミ肢
をちやめたまゝ持ち去られるこみを氣つきませんでした。

私の残忍性は蜘蛛以上でした。

やがて蜘蛛の破局を足駄をはいた私が見おろしてゐました。

x x x x

忘勿草が一尺位も高く生ひ茂りました。

そして星のやうな青白い花をつけて咲き盛りました。

蝶々花は一雨毎に脊延びして、さうく一尺位になりました。で蝶々花ミ忘勿草ミ頭がそろ
ひました。

蝶々花は莖がそんなに伸びないもので、せい／＼伸びても四五寸位だと思つてゐました。
不思議なものだミ妻は言ひました。
私は忘勿草の中の蝶々花を見ました。

x x x x

一

十になる家の男の子が雑誌を編纂しました。編纂ミいつたら仰々しいでせうが、子供の氣持
は立派に編纂でした。

彼は読んでくゝゐるうちに自分でも、一つ作つてみようと思つたに違ひありません。

それに彼も咬つたものがあるやうです。

彼はある月刊雑誌のお話——ピノチオミいふのでした。——はあの石附さんが書いてゐるの
だミ聞きました。

はじめて自分のものが活字になつた喜びを彼は熟知のをぢさんミ活字ミの關係に於て味はひ
ました。

雑誌はやがて小學生全集や圓本の洪水の影響を受けたミみえて、圓本の形を具へたものを作
り出しました。

二

彼の雑誌や本は菊版のやゝ小形のもので、表紙もクレヨンで奇麗に中々思ひ附きのものです。

『皆さん次號をお待ち下さい。』
なまゝ經營者心理を其のまゝ眞似るあたり思はずふき出させられます。

三

其のうちの彼の近作エイゴシユウミいふのを紹介致します。

十頁ばかりのもので開卷第一にエイゴミ題し、彼の蒐集に成る英語單語類を六頁にわたりあけてゐます。

一語々に彼獨特の譯を附してゐます。

トンネル（山の穴）

右の類です。

終りの方に左の一文を添へてゐます。

『今オモシロイ話ラーツシテ見マス。ソレハエイゴの話デス。』

エイゴトイフノハセイヨウのコトバデス。日本ノ人ハセイヨウノコトバラムヅカシガツテキ

マス。

セイヨウデハ日本ノコトバラムヅカシガツテ居マス。

犬ハセイヨウデハドツグ、日本デハ犬トイツテキマス。

セイヨウノコトバト日本ノコトバノチガツテキルノハフシギデス。

セイヨウノコトバハ日本デハタイヘンムヅカシイノデス。（昭和三、七、上完）

木村先生

一

木村先生は本年六十二歳だ。北見のTミいふ一寒村に兒童三十名ばかりの一單級小學校長をして居られる。

先生は内地を通じて準教員生活を既に數十年もして居られる。昨年人が折角すゝめてくれて尋正にられた。

二

二人の牧羊者があつた。其の羊を逃がしてしまつた。

一人は書物を読んでゐて逃げられたのである。
一人は賭博をやつてゐて逃げられたのである。

木村先生の準教員生活を以て終始したのは、其の書物を読んでゐて羊に逃げられた牧羊者であつたからだ。

教師の質を造るものは一面社會だ。

先生のお國風として郷黨は資格も超越して教師を厚遇する。

恒産ある者或は貧乏でも家格に誇負する者が多く志望する。

先生に敢て教師として一等鑑札の要がなかつた。

三

一石塊も之を善く觀るものには、此の大なる地球の運命をも知るこゝが出来らう。
自分は木村先生について何もなく書かないでは居られぬ衝動に驅られる。

それは先生を通じて至純な原始教育の精神が本道の一寒村の單級小學校に——ベビーオルガン一箇、理科器械數點、參考書數冊を其の設備の總べてとする所謂簡易教育所——其の片影を偲ばせるものがあるからである。

四

先生は攷學心の旺盛な人だ。

理念といふ語を佐藤熊次郎氏の教育學概論に發見し、之の疑問を文化と教育上の諸問題に尋ね、更に教育學汎論に問ひ、尙ほ追究して哲學辭書に短期講習の講師に就き、徹底的にイデオの眞を擱まうとするのである。

五

先生はよく夏休を利用して北見から札幌の短期講習に出て來られる。

一日早天つゞきの釜の中に在るやうな日先生の下宿を訪ねてみた。

去年の時あの部屋だつたが、西日がカツミ照りつけてゐる二階の其の小部屋を仰ぎながら六十二歳の先生を思つた。

先生は留守だつた。上りこんで退屈なまゝに其の机の一冊を取り上げて見た。

北海出版社發行師範講座といふ本だ。

中を繰つて行くに先生努力の書込みがある。

代數といふ所で或る欄外に鉛筆で「難しい。」と書いてある。更に其の下に萬年筆で後日書き込んだらしいものがある。曰く「正數を減するは其の數だけ被減數を耗すこゝなり。負數を減するは其の絶對値だけ被減數云々……。」と書かれてゐる。

六

先生の教へた兒童が尋常科を出るに高等科は皆、其の村の所謂中心學校へゆくののである。先生が嘗つて言つてゐたこゝみがある。

「おれの教へた奴が高等科に行つて笑はれてはならない。今の算術は代數幾何が入つてゐるからな。」

自分は先生が、此の代數を苦心して今度の講習にも出て來られたこゝみを思ひ泛べて、改めて其の書込に敬意を表した。

七

去年のこゝみである。先生から度々手紙で、今度高等科に入る部落の子供を札幌あたりの素人屋で置いてくれる所がないか、こゝみふのであつた。

其の子供の親は一向氣乗りがせん困つてゐるが、相當に見込みがある子供だから、札幌の高等科に出しておいて、師範學校に入れて勉強させてみたい。學費は自分こゝしでも毎月出來る丈送らうこゝみふのだ。

次いで夏休みの講習に出席された時、色々子供の家事情を聞いてみた。

それが今年の出札で、大體先生が其の置いて呉る家も見込をつけてきめたらしかつた。

八

自分は都會の中等學校入學兒童を持つ親こゝ、其の擔任教師との關係に相到せざるを得なかつた。

所謂豫習こゝみこゝみに附随する種々の問題、之の問題を視點こゝして眺めた親こゝ教師こゝの態度、而してそれが何に基因するかこゝ考へさせられる。

九

木村先生はお茶好きだ。

阿寒登りをするのに、お茶を携帯して笑はれた。下宿屋にも勿論携帯する。

先生は折角の出札に狸小路あたりや、石川縣物産館・丸井・五番館こゝ茶呑茶碗を探しまはられる。

お茶は國からわざ／＼取寄せたものを用ひられる。

學校附屬の畑一反歩、お國風で豆を植ゑ地味噌の眞似事をして佐渡味噌を嗤はれる。

何々何々獲つてあまり出來がよいので、商人から何圓に賣つてくれこゝせがまれて、部落の百姓爺さんが降參する。

豚何頭、奥さんが丹精で丸々こゝ肥え太る。

寒村の落葉のかそけき時ふこ可愛がりきつた次男と孫との新しい死の思ひ出が過ぎる。
國に歸つた長男が内地に來い〜いふが、一人で食へる中は一人で食ふ〜いつて奥さん
二人で靜かに國の茶に味到される。

十

自分は先生の寒村の生活を色々に想像する。
併して一體先生の生活の中核が何だ〜考へてみる。

六十二年の崎嶇たる人生の斷面を看盡くし悠々〜して迫らざる、何物をも求めざる一單級小
學校教師としての至純な安住の生活を覗き得られたやうな氣がする。

十一

現代教育の特殊相を後世の史家が筆にする時、劈頭に何〜書くだらうか。

- 一、大量生産。
- 一、鐵筋コンクリート。
- 一、學校會社。

先頃小樽の友人から琴似の白雲山莊に行くが、來ないか〜行つて來た。

會遊の薩摩の健兒社、或は松下村塾の面影を、幾分偲ぶ〜が出来るかも知れない。

日高や北見の山の中には、准訓導や代用でえらい奴がゐるぞ〜言つたW視學の話と思ひお
こす。
(昭和三、八、二九)

珪 琰 先 生

◇ 前田珪琰先生の十三年忌が此の五月十九日であつた。

過去十數年間の本道及び札幌市の教育界に歴史的展望の眼を放つた時、珪琰先生は色々の意
味に於て忘れがたい人である。

◇ 自分に向ふ見ずの眞つ盛だつた年齢二十五六〜いふ頃の二年數箇月〜いふ僅かの間の〜こさだ
つたが、珪琰先生の教壇上の人としての印象は今でも忘れがたいものである。

◇ 二十八日の晩、珪琰先生の法事に招かれて、豊平の湯殿山の説教所の齋藤和尚さんが御經の
後で、珪琰先生のお里や先生の思出を語られた時、十數年來持つてゐた自分の珪琰觀にウンさ

うだつたかと思はず膝を打たせたものがあつた。

◇ 珪瑛先生のお里は山形の鶴岡在である。委しく言へば東田川郡大綱村字大清水といふ山の寒村だつた。

山を一、二里登つて其の山頂から更に幾つかの峯を谿谷を上下した山奥に點在する戸數二三百戸位の村だ。

◇ 全村山形三山の一つである湯殿山大日坊の末寺の坊さんといふ格で、平生はモンベ姿のお百姓で山腹の山畑に鎌をふるつてゐるのだが、山上の寺の合圖の鐘が鳴り渡るに一齊にモンベをこつて衣姿の僧形に早代りして、寺のお勤めに集まつてくるといふ屯田兵を僧で行つた様な村の生活だつた。

◇ 珪瑛といふ先生の名前が成程と讀めると同時に、先生の教壇上の姿が敬虔な宗教家的タイプを多分に持つてゐたことも背かれるのである。

あの鶴のやうな長い瘦軀を、黒板片手寄りに斜に引いて、板上に其の兒童の顔を見較べなが

ら、思ふ壺にはまらない兒童の答を「ウ、もう一邊考へろ」と言つた切り上眼氣味にギロリ眼を光らせながら、答の出るまで何分でも待つてやるぞと、口を引緊めて立つてゐた姿を憶ひ起す。

◇ 珪瑛先生の宗教家的型は所謂眞鸞宗のやうな濕つほいものでなく、粘り強い積極的な、而して素朴にして男性味を多分に發散する折伏性を持つてゐる。

◇ 珪瑛先生はよく子供等を受した。併し先生の兒童愛は青年教師のよく口にする謂ふ所の教育愛でなかつた。

甘美なる夢と感傷との假象の中に浸つて、ビイドロにでも觸れるやうに、兒童の衝動其のまゝを甘やかし煽てあけるやうな兒童愛ではなかつた。涙を踏越えた峻嚴だつた。

◇ 自分の幼少年時代の記憶から、縣下の人々が奥羽を縦走する背梁山脈を遙々越えて、裏日本の珪瑛先生の御國出羽の三山、湯殿山、羽黒山、月山に所謂お山上りの六根清淨の白衣の行者

姿で、時々郷里の街道を群をなして通つたこゝを憶ひ起す。

珪瑯先生の少年時代に於て湯殿山大日坊の本山に、之等の行者連を案内したこゝいふこゝをきゝ、外柔内剛のきかぬ氣の珪瑯先生がこんなこゝから培はれたこゝだつたらうと思ふ。

◇
珪瑯先生は大正六年五月十九日、東學校の首席訓導として、四十五歳の短命で逝かれた。先生の此の短い生涯も、随分其の内面に相剋衝撃した反面を持つてゐたらしく見られる。多分鶴岡の中學と思ふが二年迄修學半途退學。

西村山郡五百川小學校代用教員拜命。

優良なる將來を見込まれ、村費を以て山形の師範二部に入學卒業。

渡道したのが、何年頃か不明だが、錢函、余市等の小學校に奉職。

其中アメリカ行を志し、巨利を一舉に收めやうと計畫したがマンマミ失敗し、現小樽市助役渡邊守治先生に教はれ東小學校訓導拜命。

後の名訓導前田珪瑯先生が、アメリカ行を志して一攫千金を夢みたこゝがあるなき、人間的な先生の姿が見えて後の名訓導に一層の親しみを覚えさせる。

◇

自分が二十四歳の時、ボット出の粗野な頭で火鉢の側の珪瑯先生と畏友池田庄太郎君とのカントの認識論に関する精深な議論の上下を聞いた時、わからぬながらも明快な文章が人を惹きつけるあの種の索引力を以て、えらいもんだなと二人の顔を見なほしたものだつた。

今頃の讀書子の術學的な齒の浮くのちがつて、十男の田舎くさい朴強漢が教壇上の現實の問題から談偶々此處に及んで、最後の解決の鍵を求むる必要感に迫られつゝ、謙虚な態度にボツリ／＼吐き出して行く話は側で見ても奥床しいものだつた。

◇

珪瑯先生はクニルリングの數概念を精讀消化し、長い教壇上の經驗から獨自な幼學兒童の算術教育を生み出してゐた。

形象論の上に築かれた國語教育は、既に々々其の頃教壇上に立派に實現してゐた。

東學校の古い簿書の中に、珪瑯先生の修身科教授細目や書方科教授細目等の貴重な大冊な研究がある筈である。

一字一句も自分の血が通つてゐるのだと言はぬばかりに克明に書いた、高雅な毛筆の蹟が其の人を語つてゐるだらう。

◇

當時の及川龜之進校長が其の頃、札幌一中の堀澤教諭が讀本の『田舎の四季』『奈良』の韻文の作者だつたのを招き研究教授をした時、珪瑛先生は田舎の四季をやつて、堀澤教諭の批評を乞ふたが、作者の豫期しなかつた深みある解釋だといつて、ある公卿だかの俳句道の逸話を例證して、讃辭を呈せられたことを憶ひおこす。

此の時自分は『道をはさんで畑一面に麥は穂が出る菜は花盛り』の文を畫に描かせられたことだつた。

◇

教科書の楠木正行のところに『師直の首をさるか、正行の首をとらするか』の一文があつた。『いらするか』の一語に正行の決死の覺悟を讀ませなければ、何とんでも此處の文一句も前に進ませるもんか、あの例の眼を光らせながら、毎日々々教壇上で中島言つて見ろなご山形辯で兒童の目星しいところ一騎打をやつたことがあつた。

その中島、千葉、箱崎等が今大學の工科や醫科を苦學でこぎつけたりして、十三年忌の法要を彼等教へ子十數名が親がりの小遣の中から長い間かゝつて集めた百圓ばかりの金で、手厚く營んだことを思ふに、珪瑛先生も案外仕合せだと言はねばならぬ。

◇

日本の維新以來の思想界が、歐洲外來思想の現實を遊離しがちな講壇哲學に依つて支配された、其の不滿を文明批評家達が切實な實社會の批評と指導に轉廻せしめようこ努めてゐる過程を物語るかの如くに、現在の教育界も漸く觀念的遊戯の夢より醒めて日々の教壇上に生起する教育事實の検討の上に立てる眞摯なる學級經營の活問題に關心を持たうこしつゝ、ある機運が仄見える。

◇

本道及び我が札幌市教育界の此の十數年來の歩みを回想する時御多分にもれず、中央の大きな教育界の足跡を一步も差へずに其の通り繰りかへしてきた觀がある。

酷評者をして言はしむれば、本道教育界の全野を蔽うてゐたものは、思春期青衿輩の哲學と教育教授に名を藉りた現實遊離の假象界に高踏せる秀才文壇的桃色の夢だつたことも謂ふ。

地下の珪瑛先生一塊の土くれを示しニヤレニ微笑して、其の感想を象徴するやうな氣がする。

(昭和四、五、三〇)

故 小 鹿 先 生

九月二十四日秋季皇靈祭の當日興正寺で、故小鹿達三郎先生の追悼會が営まれた。本年は十年忌に當つてゐる。本堂に集まつた四十人ばかりの顔ぶれを見て今更、故人の爲人や業績が偲ばれるものがあつた。

故人ニ師範時代の同期の廳立高女の工藤金彦先生、工業學校の石塚衛先生や、故人の先輩であり親友の仲だつた。元の札幌區時代の教育課長（尤も名は庶務課長）小西助三郎先生、それに部下であり親戚づきあひの及川龜之進先生其他數氏の發起の下に行はれた。

◇
喚鐘の中に着席、召請讚の後追悼の辭が捧げられた。

秋の夕暮れ時の寺は、時折遊びほうける町の子供等の聲が流れてきて、一層ヒツソリさせる。伽藍の薄暗い中に、お燈明の灯が黄色く闇を浮き上がらせる。

佛前に小西先生の老いた姿が進んだ時、故人の在世當時が思ひ出されてきた。同先生の口頭で捧げた追悼の辭は哀切なものであつた。『創成川のまごころから、君の東の家のあたりまで、札幌の教育を憂ひながら一緒につれだつて語り合ひつゝ、来たこゝもあつた。』此の言葉の中に當年の課長ニ元老が、人知れず苦心した様子が目のあたりみえるやうだ。

◇
更に石塚先生が友人總代ニして、及川先生は舊部下職員總代ニして追悼の辭を讀んだ。超越したやうな石塚先生も佛前に立つた時、淋しく見えた。及川先生の追悼の辭は後に掲げる。

◇
後輩ニして小鹿先生を悼むのは、生前の知遇に對する感激のみではない。小鹿先生の意識の力點は、所謂大衆に先んじて憂ひ後に楽しむもので、終始念頭に札幌の教育を如何せんといふ大きく全体の上に据えられてゐた。

賣名や權勢や私慾を離れた高明なものだつた。
此の力點は高明を生みあらゆる人を抱擁し得た。同窓意識を超越して當時の首席校長鈴木又衛先生を支持し、今時めく連中のみを上げて、及川龜之進先生を信頼せしめ、坪谷俊治先生を敬服せしめ、石田磊三氏をして首席を肯はしめ、福井茂三郎氏を股肱たらしめ、芦田省三氏を感激せしめ、富樫勳氏、岡田忠著氏、永峰治朗氏、林里一氏の現在市内校長笹原健三氏等市内の首席連を一度は部下ニして悦服せしめた。

◇
一休小鹿先生は人が可愛くて仕方がないやうだつた。

『おい、まア全道を見渡してえらい奴はなア』といふやうな風に語り出して『三井専次郎あいつはえらいぞ。』と一人々々數へては悦んでゐたものだつた。故人は札幌だけではなく全道の初等教育界が終始頭にあつた。

此の『人』を集めてウンミ働かすことが、小鹿先生の學校經營の要諦であり教育振興の對策の焦點であつた。

小鹿先生は自分の統制下の職員組織に、慎重に人物を撰擇したのみでなく、札幌全部の學校に管外から人を入れる時、親切に世話を焼いたものだつた。

其の當時の學校は、何處の學校に今度えらい先生が、來たさか、あの學校の誰の授業を見ろさか、學校經營も學級經營も何れも、其の人を見、兒童の學習態度を見るといふ點に主點を置いたものである。

近頃の學校は所謂設備競争時代で、何處の實物幻燈が八百圓だの、まこのピアノが二千圓だの、第二義的なまことを騒ぎまはつてゐる。

萬葉の歌古今まの差が、恰度小鹿時代ま近頃まの對照を示してゐる。

歌の心——人間の眞實、新鮮なる感覺——を言葉に素直に落した萬葉ま、心を忘れた華麗な詞の文を弄んだ古今の傾向まの比較に似てゐる。



小西助三郎先生の課長ぶりが、又實務者を背景にして其の輿論を代辯する態度で、實務者ま理事者まがピッタリして、札幌の教育經營を進めて行つた。小西先生の教育經營も又『人』を得るまところに力點を置き『人』を得て如何に之を優遇するかに就いて苦心を拂つた。

菊造りの苦心は如何にして、土を造るかにある。

『地力』を造るまが菊作りの専心するまところで、菊の鉢や鉢を載せる柴檀の臺なきは後のまこである。

北海道の農業は立木を伐採して、草を焼き拂つて播種するだけに力を入れる。所謂略奪農業で地力を維持し地力を増すまを忘れてゐる。農場の外柵をめぐらし、門標を壯大にし、バンガロー式の壯麗な牧舎を建て、農場の外觀に金を掛けてゐる。

土地の力のない所から、い、物、みは採れる氣遣ひはない。

教育に於ける物的設備は、人を得てはじめて其の効力が表はれる。

最初から最後まで堂々たる校舎ま、立派な何か眼に見える物ばかりに金を投じて、其の外容ま形式を誇つてゐる。素人だましにはもつて來いで、道樂ましては無難な道樂でもあり、責任ある局に立つ者の功績を列舉する場合の一箇條にはなるが、第一義的なまことを覘ふ具眼者の

洞察を免れることは出来ない。

◇ 小鹿先生は札幌全体の學校問題が起るに、一人でサツサミ區長や助役に會つて素直に多數の意のある所を通じ、問題の歸結するところを啓蒙的に陳べて反省を促したものだつた。此の際小西課長との默契は、益々小鹿先生の進言を効果的ならしめた。

元老らしき元老の凋落は何れの社會にも世の推移につれて目立つてきた。

公正に私心を離れて全体のために憂ひ、且つ動く元老は功利的な唯物的な俗腸を洗ふ清劑である。及川先生の追悼の辭は小鹿先生を悼む辭であり、現下の教育界の一面を悼む辭でもある。

(推敲の暇なかりしを謝しつゝ)

◇追悼の辭

本日茲ニ故小鹿達三郎先生ノ追悼會ニ當リ公私ニ亘ル指導ト眷顧ノ深キ御懇情ニ浴セシ一人トシテ先生ノ靈ニ申上ゲマス。

先生逝カレテ烏兔眞ニ匆々トシテ既ニ十三年此ノ短カラヌ十三年ノ送迎ハ我等後輩ヲシテ先生ノ溫容ヲ偲バシムルコト愈々切ナルモノガ御座イマス。

先生ノ我等後輩ヲ待ツヤ實ニ慈母ノ如ク而モ所謂紙牘ノ愛テハ御座イマセンデシタ。我等ハ世路ノ一難

ヲ迎フル毎ニ先生ノ氣魄ト威容ニ打タレテ其ノ法儒ニ鞭ウチツ、進ムコトガ出來マシタコトヲ衷心カラ感謝致シマス。

不肖現在傍系テハ御座イマスガ教育界ノ一員トシテ特ニ札幌市初等教育界ノ動靜ニ關心ヲ持ツ一人テ御座イマス。先生ノ初等教育界ニ貢獻セラレタ大キナ御功績ハ當時ヲ知ルモノノ等シク認メザルヲ得ヌトコロテ御座イマス。我等ハ市初等教育十三年ノ進程ヲ顧ミ先生ヲ追惜スルノ情愈々深イモノガ御座イマス。

先生ノ學校經營ハ今ニ至ルモ尙我等ニ好模ヲ垂シテ屢々我等ノ話題ニ上ルト共ニ一座ノ追懷ヲ唆ルモノガ御座イマス。

教育ノ事ハ特ニ眞ニ人ヲ得ルノ一事ニ盡クルモノト信ジマス。先生ノ學校經營ニ於ケル日夕ノ苦心ハ如何ニシテ人材ヲ得、而シテ如何ニシテ人材ヲラシムベキカニ在ツタノテ御座イマス。而モ事實ニ於テ先生ノ抱擁力ノ偉大ハ多様な要材ヲ其ノ傘下ニ集ムルト同時ニ先生ノ天賦ト修養ニ俟ツ統制力ト情味トハ協調ト喜悅ノ裡ニ各ノ獨自性ヲ遺憾ナク發揮セシメタノテ御座イマス。

當時ノ世態ト實務者ニ對スル當局ノ理解トハ教師ヲシテ眞ニ教育ニ専心セシムルモノガアツタニモ因ルモノト存ジマスガ學校經營者トシテノ先生ノ識見ト手腕トノ卓越ヲ物語ルモノテ御座イマス。

今ヤ市内小學校、當時僅カニ七、八校ニ倍加シ制度施設ノ整備並ニ物的設備ノ充實校舍ノ輪奐ノ美等其ノ外容堂々トシテ市初等教育界十三年ノ歷程ハ誠ニ順潮ト謂フベク人口十數萬ヲ擁スル本道ノ首都トシテ誠ニフサハシキモノガ御座イマス。併シ教育ノ事ハ其ノ實績ヲトスル唯一ノ尺度ハ實ニ人デナケレバナリ

マセン。十全ナル制度ト施設ト設備トヲ驅使活用シテ教育ノ實効ヲ與フベキ唯一ノ豫件ハ實ニ教育精神ニ燃ユル兒童ト文化トヲ熱愛スル教師其ノ人ヲ得ルニ在リト信ズルモノテ御座イマス。

我等ハ此ノ觀點ニ立ツテ十三箇年ノ市教育界ノ進程ヲ檢討スル時先生ヲ追惜スルノ情愈々大ナルモノガ御座イマス。

我等ハ學校經營上ニ於ケル第一人者トシテ當時ノ教育界ニ好指針ト眞摯ナル研究熱トヲ投ゼラレタル先生ヲ偲ブト共ニヨリ以上ニ先生ニ待ツベキ大ナルモノガアツタコトヲ衷心思ハザルヲ得ナイノテ御座イマス。

先生ノ志ハ常ニ一個ノ私心ヲ離レ札幌初等教育全体ノ休戚ノ上ニ在ツタノテ御座イマス。先生ノ社會性ト俠氣トハ一學校經營者トシテハ余リニ大キカツタノテ御座イマス。

先生ガ苦惱ノ病床ニ在ツテ尙其ノ念頭ヲ往來スルコロノモノハ實ニ初等教育ノ將來ト多數實務者ニ對スル深キ友情トテ御座イマシタ。臨終ニ於ケル先生ノ遺言ヲ通ジテ我等ハ深キ慰藉ト景仰ノ念トニ打タルモノテ御座イマス。

刻下ノ輕佻ナル世相ト一身ノ利運ニ終始シテ他ノタメニ圖ルコトナキ人々トヲ顧ル時先生ヲ追懷痛惜スルノ情一層切ナルモノガ御座イマス。併シ今ヤ先生ノ誘掖肩頼ニ浴セル後輩並ニ子等ノ中教育界ニ官界ニ凡ユル方面ニ確固タル地歩ヲ占メツ、活動スル者漸ク多キヲ見テ瞑スルニ足ルモノアリト存ジマス。本日茲ニ先生ノ地下ノ英靈其ノ御冥福ノ愈々深カラシコトヲ祈ルト共ニ希クハ教育界ノ爲メニ一層ノ御冥助

ヲ賜ランコトヲ切望致シマス。

昭和五年九月二十四日

舊部下職員總代
及川龜之進

旅のメモ

日高行

人間が自然と對坐してお互に呼びかけるといふことは、そんなに人間を清め深めてくれることだらう。

所謂、觸手ある都會の黄塵の裡に生きて行く都會人には、特に時々自然と物語る要がある。今度の日高の旅は短い四日間の旅ではあつたが本當にいゝ旅だつた。

明日の會場に間に合はせねばならぬプリントの草稿作製の仕事を汽車の中に持ちこんだので落ちつかない氣持であつたが、苗穂驛を發つて大谷地あたりから車窓に迫つてくる輝しい日の

光を一ぱいに浴びた沿線の秋色には思はず惹きつけられてしまつた。

千歳と美々との間の茫々たる原野はよかつた。

原野には色づいた秋草が茂つてゐた。其の中に丈の低い榎の木が一面にあの特有の頑丈な栗色の葉をつけて立つてゐた。

其の視野の盡きる野末の尾花の上に、葡萄色の樽前あたりの遠山が頭だけを見せて、視界の茫々さを一層に擴けて見せてゐる。

雄大な荒けづりな原野の姿が何哩か續いて、秋空の下に展けられてゐた。

沼の端の手前のあたりもいゝところだつた。

枯れ草の原野の凹地の溜り水や、ウトナイトの沼に影を落してゐる秋雲の白い色。

空、遠山、森ミ林、原野、小川そして人も家も一つも見えなかつた。

苦小牧の王子製紙工場を後に、日高行きの馬鐵位の小さい汽車が動き出した。

純朴な田舎人が狭い列車内に、銘々大きな荷物を頑張らせてゐた。

アイヌが乗つて来た。子供を背負つたメノコも其の夫らしいのミ母らしいのミ四人だつた。

其のアイヌの老婆の顔は此の世の中から、幸福や希望をこり落してしまつた象徴でもあるかのやうに、口の端に大きく入墨をしてゐた。黒い風呂敷をかぶつて暗い底深い瞳を車外にだけてゐた。

ガタ／＼揺れる窓縁にかけた手首から、手の甲に暗青色の入墨が無氣味に自分を挿へた。

車窓の左手に近く迫る日高の海は太平洋だ。

日の陰つた空の下の大洋は涯なく擴がつてゐた。日高の國は山國だ。山が海際まで近々ミ裾を引いて細長い平地を残してゐる。

其の細長い海縁に淋しい漁村が點在してゐた。

放牧された見事な馬、アイヌ、日高路は秋も漸く深まりつゝ、人煙の稀薄さを思はせる。

アニミズムの神は日本神話の中の天つ神ミ二つ並ぶ神だ。

人間の心の中に潜む山川草木等の自然に靈を認めて、敬虔の祈を捧げる一面は神學萬能の現

代人の中にも潜むのである。

靜内に汽車を乗り棄て、暮れがての日を惜しみながら、三石行の自動車上の人となつた。自分はS君の令兄吉田村長の村治の蹟を眺めつゝ、シビチャリ川の橋上に差しかゝつた。

其のシビチャリ橋上より見上げた左岸に聳え立つ斷崖より山上にかけた周圍の景相は、直ちに自分の心に森嚴な存在を以て敬虔神秘な感銘を與へずには措かなかつた。

赤い夕日が將に外洋に落ちこもうとして、歴史的な或種のサビをさへ籠めてゐた。

自分は車中の連れに問はずには居られなかつた。
運轉手と其の人ミが一緒に答へた。

『あの山は有名なシャクシャインといふ酋長の城跡です。今でも矢の根石が発見されるし壘石も残つてゐます。』

アニミズムが自分を問はしめたのだ。

自分は靜内の藤原旅館前から同車したメノコを今更ながら感慨深く眺めざるを得なかつた。

一時間二十五哩の速力で疾走する自動車は、人の顔がようやく見える頃三石の市街に這入つていつた。

ランプの灯が原始な日高路につましく淋しく點つてゐた。

車中が急に賑やかになつた。同行を約した三石校の尾崎良太郎兄と其の學校の職員の方々だつた。

袴をこつて、お太鼓に結んだ某女史の姿が薄暮の車内に初々しく蕩長けて見えるも日高路の旅情に一點の華やかさを點する。

ケリマヒ山道の百カーブの闇を衝いて自動車が歌笛の市街に入つたのは七時頃であつたらうが、森閑として眞つ闇な星空の下に歌笛の市街は鎮りかへつてゐた。

牛島君はじめ歌笛校の方々の出迎を受けて川端旅館に投宿した。

一風呂、旅塵を洗ひ去つて七師團長の陣まつた一室をいふのに、丹前姿で大あくらをかいて尾崎兄、牛島兄と顔を見あつた時は、本當に日高に来てよかつたと思はずにゐられなかつた。裏山を控へた大きな家の一室に軟かい懐古的な光を投げるランプの灯の下に浴後の一杯を

酌みかはす。旅情更に一層濃やかなものがなければならぬ。

歌笛の山村は秋の清涼の夜氣が凡ゆる物の響や闇の中に籠め封じて、里人の素朴な夢を裏んで更けて行つた。

此の行の目的である三石教育會の研究會は、尾崎三石校長司會者となり十二、十三と二日間の日程が眞摯と和氣の裡に滞りなく終了を告げた。會するもの全村六校殆ど全職員。前日から歌笛の盆地は山も澤も平地も悉く秋深く、はせに乾かす稻束、畦道をゆくメノコの跳姿、長閑に聞えてくる稻こきの音律、歌笛の十月小春は地方色愈々豊かな情景ではある。

自分は旅館の机上から友人達に葉書を飛ばして、日高の原始の自然と此の研究會の統制と眞摯と日高人の春日の如き情緒とに、禮讚と咏嘆と紹介の辭を連ねずに居られなかつた。

日高の自然と人に幸あれ！

(昭和三、一一)

煙霞片々

◇ 旅は人間を原始に還らしめる。

海峽は旅する者をして社會人としての尖鋭なる警戒性の衣を剥ぎ去つて、素つ裸な各人の個相を示してくれる。

◇ デオニソスの神前に跪拜する使徒は加速度に此の原人の面影を色濃くする。

修養を顔にぶらさけてゐるやうな三昧不壞の士君子の後姿に捨てがたい味ひの漂ふのを見出すのも旅なればこそである。

◇ ヴァン・ルーンの世界文明史物語にギリシヤ人が行列をつくつて練つて歩くのが大好きで、毎年酒神デオニソスを祭るためにドえらい騒ぎをすることをいつてゐる。

けれども之はギリシヤ人に限つたことではあるまい。今度の京都の奉祝馬鹿踊を見た人は、ギリシヤ人も眼を見はるやうな其の馬鹿騒に吃驚しないものはあるまい。

◇ 天満から京阪電車で五條に引き返す時、恰度京の町々に灯がチラ／＼見え出す。

枚方、八幡あたりから既に其の奉祝馬鹿踊に参加する男女の一行が、ドヤ／＼と停車の度に車内に雪崩れ込んで淀、伏見、稻荷、三京に近づくにつれて車内が壽司詰のやうになつて、ワツ／＼といふ奉祝氣分で誰も彼もイ、チャナイカ／＼といふ彼等の囃聲に捲き込まれてしまふ。

◇ 五日間かの天下御免の奉祝馬鹿踊の最後の晩なごは、京の町々如何なる小路といふ小路に雖も、イ、チャナイカ／＼のお行列にゴツタ返すやうな雑踏であつた。

◇ 三條の大橋の袂に立つてごみの中に揉まれ／＼と眞黒になつて、ワツ／＼と大道からハミ出して夜中までも續いて切れない其の熱鬧亂舞のお行列を見てゐた旅人は、ボーツミしてフアラミ大衆と共に歩いてゐる自分を見出したことだつた。

◇ 建禮門外の御所拜觀の群衆の中に立つて廣々とした御所の内苑を振りかへつた時、ふみまボロシがよぎる。

◇ 傳統的幾百年の桎梏をかなぐりこつた維新回天の大立物ごもの御車寄に揚々参入する粗野な田舎くさい白面の結髪姿。

紫宸殿の壮大な破風送りの大屋根も、大庭萬歳幡の幢幡のドツシリした高い旗も黒漆の竿。

左近の橘の繁りに繁つた縁、その黄玉の實。

右近の櫻。

悪源太の大童な武者振り。

ケーブルカーで叡山に登る。

阿耨多羅三藐三菩提の佛達我立袖に冥加あらせ給へし祈念した、開祖傳教大師の山岳佛教の原始な信仰は一山の何處にも見出すこゝが出来ぬ。銅葺朱塗の特別保護建造物といふ見せ物が寄進帳を控へて、何を見ても涙聲に南無阿彌陀佛を唱へる老ひた善男善女のお参りさんを待ちかまへてゐるに過ぎないやうなものだ。

知恩院に札幌を發つ時冥加金を頼まれた一行のYさんに同行してお参りした。流石に建物は浄土宗の大本山洛東第一の巨刹と背かれたが、恰度日暮頃のことだったので納所坊さんが突慳貪にお参りの人を追ひ立てるやうにして大戸をグン／＼締めるには驚いてしまった。

法然上人が地下で此の末世の宗教を伺ひ見る。

知恩院の裏に降りて名も無い寺小路の石だゝみを行く時、寺の門の古こけた小さなのが青苔をつけて寂然と締切つてゐる。

光琳の緑青のやうな青苔をつけた老梅の衝立を想ひおこす。

霧が深く籠めて高尾山の眺望は駄目だった。

けれども關八州甲駿信越十二州の大觀よりも、谷々から動くともなく白く湧き上つてくる霧が老杉や紅葉の間に搖曳して、高山深谷の閑寂を一層趣深くした。

小佛の關の址に入る所にあつた落ち水。

その落ち水の音。

北海道と東京京阪地方の住宅を比較して見るに、美の軌範が截然とちがつてゐる。もつと正確に言ふならば北海道人には建物に對する美的な頭が無いと云つた方がいゝ。

汽車の窓から都近くなるにつれて、瓦葺の上品に整つた格子戸の家が松や珍しい庭木や生垣に取りかこまれてゐるのを見るのはとてもいいものだ。

◇
花巻の山家の有島武郎の表紙に描いてあるやうな藁葺の大きな家。
其の古い紙の障子。

モンペはいた村嬢の大根洗ふ手を止めて温泉行の電車に一寸目をやつた姿。

◇
その山家の大きな古びた屋根を地色にして赤く生つてゐる柿の立木。

花巻の電車沿線の風光に忘れがたいものだつた。

石鳥谷、日詰、矢幅、盛岡、耐川、あたりの車窓に送迎する山野のたゞすまひも見飽きぬ眺だつた。

そして荒涼とした初冬の東北の山河は深い史的回顧と漂渺たる傳説と詩の世界に沈潜せしめられる。

◇
箱根は眞に天嶮である。こゝも亦幽邃の自然に詩と傳説が絡む。

十哩の登山電車も早雲山のケーブルカーも箱根十二湯の殷賑もあの峯巒溪谷の鬱氣を俗了せしむる事が出来ない。

湯本、塔の澤、大平台、宮の下、小湧谷、強羅と早川の深い溪流に沿ふて車窓に展開する明星、淺間、鷹の巢、早雲、二子、蓬萊神山、冠と其の時々の峯巒の姿は、所謂名勝の地の俗悪さが微塵もない。

早雲山より、道了別院を右にした見晴も素ばらしい。

遙かに伊豆の海が見える。

早雲山より大湧谷の凄い大地獄を左右に馬の背のやうな勾配を汗だくになつて姥子に下り湖尻に出る。

◇
斧鉞を入れぬ杉の翠緑、雑木密林の山道を寂寞たる山氣に人懐しく姥木に下るその山道。

長尾峠を右に峯巒重疊の密林の淡紫色の梢頭にヌツ顔を出した白芙蓉の富士。

芦の湖上より振りかへつてみた富士。

富士、富士、富士。

物語りめく芦の湖。

塔が島の離宮。

關の址、老杉、會我、虎の碑、芦の湯の古びた軒端、疾走する自動車上倏忽として薄暮の中に隠顯する。

郷里の自然と人事。

小蝦と鯉と味噌汁の味。

(昭和三年十二月二十五日)

旅のメモ

◇
旅は俺を素直にする。一人旅の時は特にさうだ。平常の自分を考へさせてくれる。素地のまゝの自分が映つてくる。

家庭人としての自分を考へさせる。もつとやさしい俺にしてやらうと殊勝な心掛にする。今朝家を出た奴が暮方既にさうなのである。

◇
旅にして素直になりぬ

我が性の怒り易きを

矯めんと思へり

走る汽車で、新緑に洗ひ浄められた氣持で一寸車内の周囲を氣にしながら、こんなものをポケットの手帳を取り出して書きつける自分を面白く思ふ。

◇
俺は歌を作らうと思ふことがない。不思議に旅に出ると歌らしいものを考へてみたくなる。煩瑣な周囲から切離してくれる旅は素朴な自分を取り戻してくれる。そこにゆとりが生ずるのだらう。

◇
汽車が走れば走る程、今までの生活と交渉のない世界へ自分を遠く搬んでくれる。屈託のない自分の心の隅にポツカリ歌心が芽を出すのだ。

◇
若し大膽さいふことがあるならば、それは今夜札幌神社の宵宮祭だといふので一本つけてくれた香に出したなまこを此の世の中で一番最初に食つた男と(或は女か)俺が歌だといつて發表する事だらう。

大いなる者の相^{すがた}かも乗鞍は
五月の空におごそかに立つ

越後糸魚川より車窓左に妙高、乗鞍、白馬等磊塊^{たいがい}として大きく天に白々^{はくはく}と雪を戴いて旅人を
撲つてくる。

宿で澁谷君に見せたら修身のやうだ^うと笑つてゐた。

◇
彼の岸駒の描きし虎の下繪はも
放膽な兒の自由畫の如し

金澤博覽會の第二會場に百萬石文化展覽會がある。

加賀の千代の短冊、柿右衛門の皿、岸駒の虎なき目を索かれる、岸駒が前田公からの命で描
いた虎の下繪はこても大きな二頭を墨痕^{すみあと}、りんり^{りんり}と書いたものだ。成心のない素朴な大膽な筆觸
の兒童の自由畫に撲たれるあの氣持である。

◇
越後路の名立^{なだち}の濱の小路小路に
いづこも同じ子等の遊ぶも

春山の若葉けだるし崖ぶちに
晝食^{ひるめし}の後を土工等眠れり

◇
羽後の國の山ふみころの薬家よし
我二三日まらうきならめ

象^{きさ}潟^{がた}は寂びし鄙^{しづ}ぶり松古りて
旅の翁の姿浮べり

◇
越中は女働く國ならし
早笛植うる娘いさほしきかな

越中に入りて村々の屋敷の森の木深いこゝ、鎮守の森の黒々^{くろくろ}と茂れる屋敷々々に附屬する御
影の墓石の素晴らしく立派なのが目を索く。皆富裕らしく見える。

特に女の甲斐々々しく仕度した野良の働き振りが目につく。男の数が少なくて殆ど女だ。
此の民風を馴致した歴史的素因を知りたい。

入善驛頭より見る立山白馬の雄偉、生地驛頭より見る遠く黒部川上流の天を劃する日本アルプスの豪宏、河口北海の青海なり。萬頃の田、青葉の森、その自然もいゝ。民風も自然、民風も宗教、藩政に相判した。

◇

武藏野の木の叢深き天沼に
青葉の雨を旅にして聴く

天沼の友の庵の青桐の
雨吸ひ足らひし其の緑かも

東京の郊外杉並町天沼高坂沐溪君の家に泊つた。武藏野の森の中の別荘風の君の家は俺の旅塵を洗ひ落してくれた。

青葉を打つバラ／＼いふ旅の雨の音を聴きながら、白々夜明けるまで飲んだ。

『群青色のホラ空を見なセイヨ。』

茂つた木立を残して薄白く白み渡つて来た曉闇の薄明を群青色こいつた高坂君の言葉を奥さん三人で又笑つた。

其の座敷の前の直ぐ緑玉の棒を立てたやうな梧桐の幹に葉の雨を吸つた緑こいつたらない。

(昭和七、六、一五)

(人)

昭和八年二月五日印刷
昭和八年二月十日發行

北邦教育協會第一編
五〇〇部限定版

〔定價金七拾五錢〕



發行所

| | |
|-----|----------------------------|
| 編輯者 | 北邦教育協會 |
| 印刷者 | 北海道札幌市南二條四丁目三番地 本間源吉 |
| 印刷所 | 北海道札幌市南二條四丁目三番地 博文舎印刷所 |
| 發行所 | 北海道札幌市南二條四丁目三番地 北海教育評論社 |
| 發行者 | 北海道札幌市南二條四丁目三番地 北海教育協會 |

電話小部 六一九六
掛號小部 六一七六

259.5

125

終